



源氏和秘抄

江戸中期  
早期



源氏和秘抄

一三三ろりつが

いづもこれ九時小り



多し此祝河も九格兼此九時とい延敷九時門よ  
たそそ(朱雀院)とら能そそきあしく院よなそそ入  
冷泉院といしつわと九時よなそそ入るこゆるん一  
と西のま乃右大臣たわはるになそそ入たるりりは  
人たつこもこといき延敷乃清帝の九子そけよあ  
よりのきは茶か尸そくるなりこたけよ尸ゆか人こ









大書りしなみのそも大書りしなみ  
とて書き置とておろし

ふもたてしなみの  
とて書き置とておろし

とて書き置とておろし  
朱雀院の書き置とておろし

とて書き置とておろし  
とて書き置とておろし

とて書き置とておろし  
とて書き置とておろし

とて書き置とておろし  
とて書き置とておろし

とて書き置とておろし  
とて書き置とておろし

とて書き置とておろし  
とて書き置とておろし

とて書き置とておろし  
とて書き置とておろし

とて書き置とておろし  
とて書き置とておろし

こよなき  
ふれ外しとらふに又あひらうららふと  
けせぬわ 養ひけあし けりひい なるこ  
なり ぬきわらふらひけりす なるす  
くやこの文と東に流る十三と入田のひりすの  
くこやあつたとすけりい  
わらう 立居し 村かーとすい かくととらこ  
くくすい ころもむのころははひけり  
けりたてく けりといふとけりけりけり  
火このけい くるんといえ服する人なり

いまいもろ大えん くるん人  
大なる人 ころけりあきん けりけり  
いひこけり けりけり  
あきけり ころけりけりけり  
そひけり けりけり  
さあひ 内裏のてん  
けりけりい ころけりけり  
ころあせと 色のけりけり  
なるけり けりけり



あまのりふらむはむらぎのやうな  
たのこしをいひよこしよまへ  
くくるんらりのたよごとす  
おまほまほくくるんらりの  
もろりおまほくくるんらり  
いよおまほくくるんらり  
すくすくしをいひよこしよ  
いゆるりおまほくくるんらり  
たのこしをいひよこしよ  
源氏物語十二

あまのりふらむはむらぎのやうな  
おまほまほくくるんらり  
あまのりふらむはむらぎのやうな  
からりおまほくくるんらり  
おまほまほくくるんらり  
いよおまほくくるんらり  
すくすくしをいひよこしよ  
いゆるりおまほくくるんらり  
たのこしをいひよこしよ  
源氏物語十二

あまのりふらむはむらぎのやうな  
おまほまほくくるんらり  
あまのりふらむはむらぎのやうな  
からりおまほくくるんらり  
おまほまほくくるんらり  
いよおまほくくるんらり  
すくすくしをいひよこしよ  
いゆるりおまほくくるんらり  
たのこしをいひよこしよ  
源氏物語十二



Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style across several lines.

らあとうし 家のあまふりあはれたにあつて  
 こまかい 八咫やじまのいぢまなごゝのあまのこ  
 そくきく だーちちのあまあぢぢ  
 袖らけあまのよちちのあまのこ  
 むまはくろ ちちのあまのこ  
 物こいたら 女房のうしろあまのこ  
 うちのあまのこ ちちのあまのこ  
 ららひちち ちちのあまのこ  
 ららひちち

されんまろ ちちのあまのこ  
 ままあも ちちのあまのこ  
 赤だくる人よ ちちのあまのこ  
 いちちのあまのこ ちちのあまのこ  
 ままのあまのこ ちちのあまのこ  
 あまのこ ちちのあまのこ  
 ままのあまのこ ちちのあまのこ  
 つないで ちちのあまのこ  
 ちちのあまのこ ちちのあまのこ

移るは かくそいふさのしとていあふか  
 あふかたに 戯れに 戯れに 戯れに  
 ままの あつらひのいふま  
 うらむらん せんせんせん  
 人なること 我ら せんせん  
 胸に かくる せんせん  
 からけり せんせん  
 ともや せんせん  
 せんせん

こころの せんせん  
 せんせん  
 あんちよ せんせん  
 えさ せんせん  
 せんせん  
 せんせん  
 せんせん  
 せんせん

じりりて 腹をいそぐ

はくはくして ちかちかしく

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ

あつあつと 汗をぬぐ



うーわい 女房もあつたのうらたつたわい  
なう 中おのりしてさくしてさくして  
と移りよさる きのききしてさくしてさくして  
なりとわの田つるまに わつたかきさつた  
みまけいしし 音野のえんせんと精進す  
うさき ながいけいさく 長生殿の古きなり 仍  
またのりし ころも ありん  
ゆかりてくくさく さくさくさくさく  
何れ 院 六条河原の院にけいせいと  
いふなり

ちふのりし 年よりしてさくしてさくして  
けいさく ながいけいさく 長生殿の古きなり 仍  
またのりし ころも ありん  
ゆかりてくくさく さくさくさくさく  
何れ 院 六条河原の院にけいせいと  
いふなり

あつたかきさつた  
なう 中おのりしてさくしてさくして  
と移りよさる きのききしてさくしてさくして  
なりとわの田つるまに わつたかきさつた  
みまけいしし 音野のえんせんと精進す  
うさき ながいけいさく 長生殿の古きなり 仍  
またのりし ころも ありん  
ゆかりてくくさく さくさくさくさく  
何れ 院 六条河原の院にけいせいと  
いふなり





つらとししゆーひ色ハ紅のすや

と急はひた

いしきさーいしきさ

とんこかりのひきぬら大ま ぬらひのすうさんよ

てある人乃ひきぬらの大まはぬらひとよ

おがらうらうら 内裡とぬ

おらうらうら 内裡とぬ (おらうら)

いしきさーいしきさ

ぬらとぬらと あまぬらと

ふゆふゆ まゆふゆ

あまぬらとぬらとぬらとぬらと

えひのーう たふひのぬらと

まゆふゆ まゆふゆ

おらうらとぬらとぬらとぬらとぬらと

えひとぬらとぬらとぬらとぬらと

なるらとぬらとぬらとぬらとぬらと

ひそくちやんぬらとぬらとぬらと

ぬらとぬらとぬらとぬらとぬらと

おらうら



襦きとよほそなうとよほそ人のこころを  
むらさふたりれさるあんとつひ人女  
ふらさくまをかんそ破のあまを  
そふそ目よむとてなくまひとまける女を  
書をすりて入けるをむらさくれとてま  
いのむら目やわしなむなむとすこぶ女  
主女れある病よとほらさる君えすまよ  
墨はくふらさくま  
うらさくま

口もみらの歌

きあつく候 三葉をむらさくむらさく  
あ、せいひんとさむらさくむらさく  
かきうひんのあ おきうひんとさむらさく  
らむらさくむらさくむらさくむらさく  
こきう むらさくむらさくむらさく  
むらさくむらさく むらさくむらさくむらさく  
むらさくむらさく むらさくむらさく  
むらさくむらさく むらさくむらさく

後いのかい 舞乃きおくじり

ふき海 せふんよひきりて あまのついで

いそく あまのついで ち清波のきよ

入あや 舞入あやを あまのついで 舞 あまのついで

てうん あまのついで 舞 あまのついで

なやふ あまのついで 舞 あまのついで

か あまのついで 舞 あまのついで

あ あまのついで 舞 あまのついで

うら あまのついで 舞 あまのついで  
 中 あまのついで 舞 あまのついで  
 う あまのついで 舞 あまのついで  
 う あまのついで 舞 あまのついで  
 の あまのついで 舞 あまのついで

か あまのついで 舞 あまのついで  
 海 あまのついで 舞 あまのついで  
 う あまのついで 舞 あまのついで  
 又 あまのついで 舞 あまのついで

めんえん 花めえんよらん文人をうけて志とほくら  
まじりたる標額とわんをまとさうけてはくらし  
ん可らちろおぢたることとまじりてらん儒者をば  
こもらんのかきとのほそこのいりたるし  
かきと かねうらうたることならし  
すいぢり ありせむし せめてはなせむし  
あふにんころのみくも  
むしあふてはくしうらうはくしうらうすうてつ  
そまじりてさうてすまはらうひびよひよひ

ちんめんのかき

なうらにちんめんをうけてはくしうらうすうてつ  
まじりてさうてすまはらうひびよひよひ  
あふにんころのみくも  
むしあふてはくしうらうはくしうらうすうてつ  
そまじりてさうてすまはらうひびよひよひ  
ちんめんのかき

おひさしとていふこと

おひさしとていふこと

扇屋とていふこと  
てとありふると源氏の志の扇屋とていふこと

六あぢい

世中うらりて 格重の山門侍位とすけり  
せんくうの格重 せんくうの格重とせんくうと  
あけらる日 笑茂らる後のあけらるて毎  
の中せじよの日はあぢい

一葉乃花がらとていふこと

山うたひらりて せんくうの格重とせんくうと  
のせやうらりてあぢい  
あせんせんくうの格重とせんくうと  
いとだぢい <sup>車</sup>あぢい

あぢい  
大なるのすいせんてんとのあぢい  
つがさくさく 女のあぢい  
んちあぢい

花のつらさ せむしをくさるる  
うさぎのうからぬ とうもろこしをいぬ  
みる物さ どのうからぬまはたさるこ  
じまのな 一糸大なるあり  
いさすばよ いたる人のこもあり  
ふれひさ知り せむしをくさるる  
花のま 伊勢の母のむすめをいぬ  
河のあけなり 宴にて花をいぬ  
るの 海は深くもいぬ

杖のほろさ 杖のつらさ  
河のあけなり 宴にて花をいぬ  
さるものつらさ 大なるのつらさあり  
いさすばよ いたる人のこもあり  
花のつらさ 杖のつらさ  
さるものつらさ 大なるのつらさあり  
いさすばよ いたる人のこもあり  
花のつらさ 杖のつらさ  
さるものつらさ 大なるのつらさあり  
いさすばよ いたる人のこもあり











いらむさあめ 俄ふあらぬしらん

十あし

そがらゆまらり ちあへくはらまらなり  
みらひ ちのちらひなり

こてくろ 西角いのとなり 一し折 若柳たる  
くふはくいこいにはきり人しんひらる 花 けり  
い祿乃くちまら い祿おさめたらくちなり  
くちまら くの名し

ひらめがうー ひとひらめあつてかうしあり

あきんあはらりあそ ひとんといふものあり

さけあわうー けくさけとあひあり

くるこ色れも くらひらりこいせあつて

なまこ女乃こい ひとひらめあつて

てさこあうれ入るあはふんとさういふなり

志とけし 志はあつてなり

あうすうへれあう ことばなり

まじれ位 ことばあつて大なりけり

むらむらのあつてなり ことばなり



ちり御けなむら ちりせはせりちるちり

ちりからなる女にまゝにたはしむるまゝにまゝにまゝにまゝに

世に

ちりからなる女にまゝにたはしむるまゝにまゝにまゝに

なふそやれむらの雲霞のちあむかしのちあむかしの

あや ちりあとしらまゝにまゝにまゝにまゝに

ちりあとしらまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

十二

あくのこころに ちりあとしらまゝにまゝにまゝに

のん

あくのこころに ちりあとしらまゝにまゝにまゝに

あくのこころに ちりあとしらまゝにまゝにまゝに

あくのこころに ちりあとしらまゝにまゝにまゝに

あくのこころに

十三

あくのこころに ちりあとしらまゝにまゝにまゝに

あくのこころに ちりあとしらまゝにまゝにまゝに

あくのこころに ちりあとしらまゝにまゝにまゝに

あくのこころに ちりあとしらまゝにまゝにまゝに

昔の枝なほいとめてふちとハ萩の木の枝は花の  
この物一つとすらすらえ萩のち一人とすはふし

十のうすな

あふそい あふそい

たすに 昔の枝なほいとめてふちとハ萩の木の枝は花の  
世に ながいよとすは萩のち一人とすはふし  
うへへ 萩のち一人とすは萩のち一人とすはふし  
むらあふちとすは萩のち一人とすはふし  
えんきん えんきんのよふこはふし

あふそいあふそいあふそいあふそいあふそいあふそい

十六あふち

あふちあふちあふちあふちあふちあふち

あふちあふちあふちあふちあふちあふち

あふちあふちあふちあふちあふちあふち

あふちあふちあふちあふちあふちあふち

十六あふち

あふちあふちあふちあふちあふちあふち

あふちあふちあふちあふちあふちあふち



大くれみら 著しむるをみふこ  
はきく せいのまら

屋戸とあふりて 我うふりたふし  
せきつらふら さいまらちらし

あまおほく 大くせきふらちを  
とらふらふら せいのまらちらし

はらたし さいまらちらし  
なちたし さいまらちらし

なちたし さいまらちらし

なちたし さいまらちらし

あまおほく 大くせきふらちを

あまおほく 大くせきふらちを

あまおほく 大くせきふらちを

あまおほく 大くせきふらちを

あまおほく 大くせきふらちを

あまおほく 大くせきふらちを

あまおほく 大くせきふらちを

あまおほく 大くせきふらちを











大んごころ女存乃わらおなり

こころなり

あはれ かつり川なり くらわ川 美哉川に  
こころ ながれぬし けいめり のの物し  
とんえん 交れぬいよこ けいこ けいせなまはら  
なんせん 妻のなすこ けいこ けいせなまはら  
をすありける 人の中よりいなる  
しほひ ことしきよき  
とんごころい 女とていふいふいふい

ていふちうして けいこ けいせなまはら  
大いかに 小いんちうけい  
あまてらたごお けいこ けいせなまはら

けいこ

野か

おらこうきて 物よおらてきいけい  
とん けいこ けいせなまはら  
とんか けいこ けいせなまはら





つしほのまゝらひはなむいづゝいふこ  
らふかへし一はくく 一はくく  
三はくくいふ 女にふはくくいふ  
よきふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

けしきさ 一はくくいふ 一はくくいふ 一はくくいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ

十八梅うえ

いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふいふ



きくはらふことよむとあつちあがぬれなまるとん  
ふくはらふしとえんりきし

女はふ

かへりてははむとくしりて  
こりてはくしりてはくしりて  
みかへりてはくしりてはくしりて  
ふくはらふしとえんりきし  
らきりてはくしりてはくしりて

あつちあがぬれなまるとん  
ふくはらふしとえんりきし

あつちあがぬれなまるとん

あつちあがぬれなまるとん

あつちあがぬれなまるとん

あつちあがぬれなまるとん

女はふ

あつちあがぬれなまるとん

あつちあがぬれなまるとん













かゝるもの

いせの森のふもと 人はくまをたもつるも  
あつこむる ちかくせんし 祿にあ 祿にあらし  
又をらま

あつこむるもあつこむるも  
のり地 けものし

あつこむるもあつこむるも  
あつこむるもあつこむるも  
あつこむるもあつこむるも  
あつこむるもあつこむるも

あつこむるもあつこむるも  
あつこむるもあつこむるも  
あつこむるもあつこむるも  
あつこむるもあつこむるも

あつこむるもあつこむるも  
あつこむるもあつこむるも  
あつこむるもあつこむるも  
あつこむるもあつこむるも







何く是て何り 知る處之年 三月 月中 此の月  
三行 一信 一初 初学 八の 初学 二

一茶大閣 道良云  
製衣作也

嘉三年正月有

正親町三條前大納言公實筆



